
紅茶をもう一杯と探偵は口にする

ツグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅茶をもう一杯と探偵は口にする

【Nコード】

N3727P

【作者名】

ツゲ

【あらすじ】

明るいミステリー。探偵とその助手と刑事さんが謎に挑む

不合格。そっけないワープロの黒文字に、その文字だけが赤く太文字でいやでも私の目に飛び込んでくる。とてもご丁寧なことだと辟易しつつ、茶封筒の中に不合格通知をしまいこむとぼとぼと歩いていく。自然とため息が零れてしまう。これで何度目だろう。この文字を見るのは、ああ、いやだ。いやだと首を横に振る。

灼熱といってもいい太陽の熱に、頭をやられてしまう。ごみごみとした街の中に行くこと二キロ。駅前の近くになると人の多いことあまりのことに呆れてしまう。

人の波を泳ぎきってついたのに、私は自転車から降りて停めつつ、見上げてしまう。

> 北村探偵事務所<

築三十年くらいだったか。三階建ての建物は、白いはずの壁は車やバイクが吐き出すガスのせいで黒く染まっている。

一階はお決まりのように喫茶店ではなくて、お弁当屋。ちなみに二階は弁護士事務所。三階に私の事務所がある。私の、というと語弊がある。ここは叔父の営むところなのだから。

上がる際にポストを確認。このとき、一階、二階のも見ておく。あつたら、それを渡しておくのも私の仕事。今日は一階はなし、二階にはエロちらし。こういうものは捨てておいていいと言われているので、見なかったことにする。で、私の勤めるポストには、郵便物はない。確認と共に駆け上がって三階。

夏の暑さにやられた頭に、三階までの昇り降り正直、きつい。三階まで昇りきったときには、ズボンが気持ち悪くて履き替えたくなった。それほどに汗をかいていた。汗っかきというのは、これだからいけない。

そんな憂鬱な気持ちでドアを開けると、ひんやりとしたクーラーが私を出迎えた。

ああ、天国。

「いらつしゃい、陽和子ちゃん」

「こんにちは」

私は頭をぺこりと下げる。

私の叔父で、この小さな探偵事務所の所長兼社員の意知朗さんだ。一番奥のデスクに腰掛けていた意知朗さんが立ち上がった。ここは、あんまり広くない。むしろ、狭い。意知朗さんのデスクに、お情け程度で私の机。その横には、お客様のためのソファとテーブルに仕切り壁。あとは、本棚。ドアの横にはお茶を汲むための棚がちょこんと設置されている。ここに置かれているお菓子類は、ほぼすべて一階や二階の人の寄付だ。私がしょっちゅうおなかをすかせているために哀れみではない善意によっていただいた品々だ。

「それで、どうでしたか」

意知朗さんが優しい笑顔で近づいてきた。

黒髪に、温和な顔。すつきりとした顔立ちは、整っていて男前といてもいいが、なんだか抜けている雰囲気もくはない。眼鏡をかけていて白いワイシャツにネクタイ。サラリーマンのときの癖が未だに抜けなくて、この服装らしい。

この人は、どうして、こんな察しの悪い性格なのに、やっていくんだらう。

私が第一に何も言わないので、理解してほしい。

だが、理解しない察しの悪い探偵は、私から結果を聞きたいらしい。

私は無言で茶封筒を差し出した。

「はいはい。陽和子さん。いけませんよ。いくらなんでも」

「はい？」

「え、えろ、えろなんて。こんな、お父様とお母様が嘆きます」

あ、しまった。間違えて、捨てるはずのアダルトちらしを渡してしまった。

今年で三十歳に行こうという叔父は、十歳も年下の姪から渡され

たアダルトちらしにあたふたしている。

「間違えました。こつちです」

私は今度こそ、私の憂鬱の原因を叔父に渡した。かわりにちらしのほうを奪い、それはゴミ箱に捨てておいた。

叔父が茶封筒を受け取り、中を見るとあからさまにショックを受けた顔をした。自分のことではないのに、あからさまにしょげてしまっている。だが、すぐに顔をあげて、笑って見せた。

「では、お茶でもいれましょうか」

「はい」

叔父のいいところは、下手な慰めを言わずにいてくれるところだ。私が、この探偵事務所にアルバイトとして厄介になって七ヶ月。

大学の就職活動にことごとく玉碎し、困り果てていた私をアルバイトとして雇ってくれたのが叔父だった。私としては、何か働いていたいというので一も二もなく飛びついた。アルバイトしつつ、就職を探すつもり満々でいたのだ。だが、現実はそのままで甘くなかった。七ヶ月経ったが、仕事はまったく決まらない。

このままではいけないなと思いつつも、このアルバイト生活も、そこそこにいいかもしれないとつい思ってしまう。

なにせ、叔父の淹れてくれる紅茶は美味しい。

紅茶が好きで、趣味としてたしなむ程度といいながら、私の名前の知らない紅茶をいっぱい所有し、いつも事務所をなんとも品のある甘い香りで満たしている。叔父の淹れてくれた紅茶を受け取る。

「これ、なんですか」

「夏らしく、アッサムです」

「夏らしく」

「アッサムは夏にぴったりなんですよ。あ、食べ物はバターや油で揚げたものがいיןですね。まっけてください。確かいただいたお菓子があつたはず」

いそいそと用意する叔父を見て、それでいいのだろうかと、少しばかり不安も感じる。お客なんて、たいしてこないし。来たとして

も愚痴を聞いて終わりとか、それってお金にならない。時々、二階の弁護士事務所から裏づけ調査というので簡単なものをまわしてもらっていたり、猫を探したりなんかもつばら。

これで、いいのか。いいや、よくない。

叔父には悪いが、いつ潰れるかわからない探偵事務所よりも、ちゃんとした会社勤めをしたいと思う。

そういつた罪悪感塗れの決意を新たにする私と叔父はいただきもののクッキーを二人でほおばった。静けさを消すために、そつと壁に置かれている小さなテレビをつける。ちなみに、これも二階から譲っていただいた。——ゴミとして出そうとしていたのを私が発見して、まだ見ることができるといので、いただいた。

小さなテレビ画面にスーツをきたニュースキャスターが真剣な顔をして出来事を報告していく。そのなかで、私は今、一番気にしている事件について耳にした。

『いずれも、二人ともまだ搜索が続いているようです』

とはいえ、なにもかわらない、ただの報告だけだったのに、少しため息。

「そういえば、あの事件どうになりましたっけ」

「あの事件？」

「ほら、いま、テレビでいった双子の失踪ですよ。それもすごいドラマですよ。片方は大富豪として育てられ、もう片方は貧乏として育てられたっていうの」

事件のあらましは、なんとも市民の私には理解できかねるが、二十年前に金持ちと、その愛人の間には子供が生まれた。それも双子だったそうだ。金持ちは子供がいなかったので、その双子の片方だけを養子にとつて、——ニュースでは、双子だったとは知らなかったと語られている。なんで、愛人がその双子の片方を隠したのか。親としての愛か、女としての執念か。それはさておいて、その金持ちの父親と、母親である愛人が死亡し、財産がある。なんと今になって双子であることが判明して、まさに王子と乞食よろしく二人は

再会して、今はさて、どうなっているかという仲良く父の財産を分けて生きていこうというのに、突然二人の失踪。それだけでも世間は注目するのに、その双子がいなくなった日に、人の胴体だけが発見されたそうだ。

これは、双子のどちらかが死んだと、思ってもいいはずだ。人前ではきれいなこといっても、所詮は金が絡めばそんなもの。

夏の季節になれば幽霊が出るというが、自分たちの子供がこんなになっていると親が知ればどうだろう。

ピンポンと軽やかにチャイムが鳴った。

私は慌てて立ち上がり、ドアを開ける。このときスマイルも忘れない。

「はぁーい。いらっしやいませ」

あれ？

私の視線には誰もいない。いたずら？ いや、そんな、怖い。いくら夏だからって幽霊が出なくてもいいだろう。

「ここよ。ここ」

生意気な声でしたので下を見ると、ちょこんと女の子が立っていた。

ショートカットに黒髪。白いワンピース。見上げている目がなんとも生意気という言葉そのまま目玉にしたような子だ。

「あ、どうも」

「どいて」

そういつてのしのと入ってくる女の子。

おいおい、なんだ。いきなり。

私としては、啞然。だって、どうみても六歳か、それくらいの女の子なんだもの。いや、もうちょっと年齢としては上かもしれない。

「あ、あの、きみ、いきなり」

恐る恐る声をかける。

そうすると女の子が振り返る。

「私、依頼にきたのよ」

「依頼、ですか」

なんですと！

まだ、六歳か、それくらいに満たない女の子が、いきなりそんな声をあげるなんてびっくりだ。そもそも、依頼ってなにかわかってるのか。啞然としている私に小生意気な目が見上げてくる。う、なんとお腹の立つ目。ちらりと叔父を見ると、にこにこ笑っている。

「依頼ですか、お客様」

叔父のいいところは、年齢に関係なくちゃんと相手にするところ。だが、この場合は、どう考えても依頼人として成立しないだろう。

「そうよ！」

女の子が振り返って声をあげる。

「では、お話を聞きましょう。どうぞ。ソファに座ってください」

叔父の対応は、なんと鮮やか。

小生意気な女の子をソファに座らせて、アッサムとクッキーを差し出す。女の子は、それを無邪気に受け取って食べる。そして満足するまで食べたあと、叔父を見上げる。

「依頼したいの」

「はい。なんででしょうか」

「私の妹が消えてしまったの！」

その言葉に、びっくり。

妹が消えた。

「あ、あの妹さんって」

「赤ちゃんなの。けど、もう消えて一週間も経つの」

その言葉にますますびっくり。

それって、すごく危険なことじゃないのか。消えて一週間。それも赤ちゃんとなると、誘拐？ 大事件ではないのか。新聞にのつても可笑しくない。いや、誘拐だとして、新聞に載るわけがないのか。私は、いきなりの大事に混乱した。

「妹さんのお名前は？」

「萌よ。私がつけたの。いっつも私といたの。お風呂だって、寝るときだって、私がいんどろみなのよ」

「萌さんは、おいくつですか？」

「えーと、買ってもらってから一年経つから、一歳かな」
ん？

女の子の言葉に私、怪訝とする。

今、この子、買ってもらったとかいった？

「けど、私、大切にしていたのよ。萌のこと、一年前の誕生日にかつてもらってから」

「萌さんは、赤ちゃんのお人形さんなんですね」

「そうよ。けど、私の妹よ」

女の子の言葉に、ようやく、ああ、そういうことかと、なんとなくほっとする。一瞬でも勘違いしてしまった自分が恥ずかしい。

「萌、いなくなってしまうたの」

「あの、けど、人形でしょ」

私が言うとなの子がきつと睨みつけてきた。

「萌は妹よ！」

きっぱりと言われて、私としては人形と言えなくなる。この年齢のとき、自分も人形を友達にしていたことはある。

この子にとっては、萌という人形は妹なのだ。

「それで、その萌さんは、いつ、どのようにいなくなっただんですか？」

意知朗さんが尋ねると、女の子は真剣な顔で向き合つと頷く。

「一週間前、幼稚園から帰ってら、萌がいなかったの。私、一生懸命探したのよ。けど、いなかったの。探してもいなくて、悲しくてすごくすごく泣いたわ。お母さんやお父さんにもいったのに知らないっていつて、だから、私すごく探したの。けど、萌は見つからなかったの」

七歳くらいかと思っていたら、もう少し若かったらしい。この依頼人は。

「萌さんの見た目はどのようなんでしょうか」

「黒い髪の毛の、かわいい女の子よ。頬がぷっくりとしていてね、ピンクの服を着ているの。お風呂にも入れるのよ。そのとき、髪の毛が変わるの。ごはんはミルクを飲むの」

女の子の言葉に私は考える。

それは、よく女の子の玩具として売られている赤ちゃんタイプの人形のことだろう。二歳からの玩具としてというものではないだろうか。時々子供の玩具のCMとして流れている。かくいう私も遊んだ経験がある。

なんとなく懐かしい。

「見つけてくれる？ 探偵さん」

「そうですね」

女の子がじつと意知朗さんを睨む。

「報酬を払うわ。ちゃんとした依頼人でしょ」

そういうと女の子がポケットから百円を二枚と五十円を一枚出してきた。これが報酬というつもりらしい。

私としては、なんといえがいいのか。

探偵家業は遊びではない。それほどに実りのない稼業だけにお客様といえは逃したくないが、これはどうみても無償に等しい。

なによりも、その萌ちゃんという人形、買ってから一年ということとは捨てられたんじゃないのか。子供の人形が汚いと親は捨てるものだ。これを見つけてくれというのは、また難しいことだ。

「ええ。そうですね。では書類にサインしてください」

「サイン？」

「依頼書ということですよ」

「わかったわ。私、ちゃんと名前、かけるんだから」

おいおい。

私はなんともいえない顔をしたのに意知朗さんがにつこりと笑って、依頼書をとってほしいという。私は、はあと返事をして引き出しから依頼書を出す。これもただではないのに。

私が差し出すと、意知朗さんが、女の子に、ここに名前を書くようにという。女の子はボールペンをしっかりと握り締めると「あいざわゆうか」と書いた。

「依頼内容は萌さんを探し出すんですね」

「ええ」

「わかりました。引き受けました」

意知朗さんはそういうと書類の担当名に自分の名前を書き、報酬の金額も書いた。ああ。それで本当にいいのか。

「いつ見つかるの？」

「人の捜索には時間がかかるものです。そうですね、明日から準備しますので、待っていただけますか？」

どうして、こんな小さな子まで、そういう分け隔てない態度なのだろう。確かに、人に平等に接するのは大切なことだけでも。

私としては、これは頭痛がする。

「わかったわ。また来るから。もし依頼料分の仕事しなかったら、怒るから」

「はい。ただ、今、知っておきたいことがあるので、お伺いしてもいいですか？ 明日の調査の役に立つはずなので」

「いいわよ。それで萌が見つかるなら」

なんともかわいくない子供だ。

「その萌さんがいなくなった状況を詳しくうかがえますか？」

「だから、幼稚園から帰ったら、いなかったのよ」

「萌さんはいつもどこにいますか？」

「私のベッドよ。あ、けど、その日は違うわ。居間に置いたの。居間の隅っこ。ママはそういうところに萌を置かないでっていうの。雑巾でふく邪魔になるから。けど、慌ててたの。幼稚園バスきてて、だから、その日は急いで出たのよ」

「そうなんですか」

意知朗さんが神妙な面持ちで頷いた。

「これでわかる」

「ええ。だいたいのことは。では明日、またきてください」

「いいわよ。ちゃんとしてよね」

女の子——ゆうかは、満足して出て行ってしまった。

なんというか、今時の子は小生意気だなあと言えない。それに叔父さん、そんな依頼を引き受けてどうするのよ。

私は、怒りたいような、情けないような、なんとも言えない気持ちになった。

子供に足で使われるなんて。

「あの子、またきますよ。絶対に」

「はい。依頼人に来ていただかないと困りますから」

「たぶん、ないと思いますけど、人形」

私は言うと叔父は笑った。

「それはわかりませんよ。とりあえず紅茶を」

またか。

そう思ってたため息をつくとき、ドアが開く音がした。まさか、またあの子かと思ってふりかえった。

「よお」

「あ、不由径さん」

私は、ぺこりと頭を下げる。

真四角な厳つい顔に白いワイシャツにネクタイ。がっしりとした体格は、なんでも柔道と剣道を嗜んでいるらしい。一見するととても怖いけど、実は甘いものが大好きだという性格のギャップがある。意知朗さんの幼馴染の刑事さんだ。

萩田不由径。

この名前を見た人は十人がみんなして「ふゆかい」と読む名前である。ちゃんとしたよみかたは「ふゆみち」。ちなみにこれは、径不由という教えがあるそうで、近道せず真っ直ぐに歩くという意味がこめられているそうだ。それは不由径さんご本人から伺った。この名前の説明することが毎回なので、慣れているそうだ。いい名前だが、ちよつと大変だと想う。

警視庁の一課の名刑事さん、らしい。名刑事というのは、ご本人が知っているの、私としてはその真意を確かめることが出来ないけれども、事件を解決したことは多々ある。まあ、その解決した本当の人は……ここはあえて言うまい。

そんなわけで、私としては、不由径さんが持ってきただろう箱が気になる。なんだろう。シュークリームかな、クッキーかな。不由径さんは、グルメな甘党。甘いものならなんでもいいというわけではなく、リサーチによって最高級のお菓子屋を何軒も知っている。またご本人も甘党が高じてお菓子作りはプロ並。

買ってきたものもいいけども、不由径さんのお菓子も食べたい。

「陽和子ちゃん、これ」

「はい。お茶の準備します」

思わず声がオクターブあがる。

差し出された小さな箱を、私は両手で受け取る。

いそいそと下がつて中を確認。嬉しいことにシュークリームだった。それも箱にはなにも書いてないので、不由径さんが作っただけらしい。

「あ、俺、コーヒーがいい」

と、背中から不由径さんの声。

叔父は大の紅茶好き人間だが、それとは反対に不由径さんは大のコーヒー好き人間だ。まるで水と油のような趣味の合わないタイプに見える。見た目には熊とささぎ。——もちろん、叔父がうさぎである。飲み物の好みにしる。得意なことだつて、スポーツマンタイプと知識系。だが、しかし、違う相手ほどに気が合うというらしく、叔父と不由径さんの仲はすごく良好だ。不由径さんがいつ来てもいいようにと叔父は、コーヒーをいつもストックしている。ちなみにインスタントは邪道だということで、豆からひいたものだ。

私は、コーヒーとシュークリームを持っていく。

お客様用のソファに腰掛けた不由径さん。その向かい側に意知朗さん。

「いーちゃん、実はな」

「はい。ふーちゃんのお菓子、大好きです」

叔父さんが不由径さんを見ると、自然とそういつてしまうのは、もう長年の条件反射になっている。

「陽和子ちゃんも、座って、みんなで食べましょう」

「はい」

私も腰掛けて、シュークリームに手を伸ばす。

叔父さんと私、二人そろって不由径さんのお菓子の大ファンだ。食べるときはなにも言わず、紅茶を嗜みつつ、甘いものに酔いしれる。これが食べ物に対する礼儀だろう。

「あのな、いーちゃん」

私たちが幸せに対して、作った不由径さんの顔はすごく暗い。とっても落ち込んでいるし、疲れているともいえる。

いつもならば、美味しく食べている私たちに豪快に笑いかけられる人なのに。

「はい？」

「参ってるんだ」

「なにかあつたんですか」

「なにかどころじゃない。見つからないんだ」

頭を抱えてため息をつく不由径さん。

「とりあえず、コーヒー飲んで、甘いものでも食べて落ち着いて、ふーちゃん」

「ああ」

いそいそと不由径さんがコーヒーを飲んで、シュークリームを食べる。やっぱり、俺の作る菓子はうまいと自画自賛しつつも、なんとも覇気がない。

「いーちゃん」

「はい」

「お前の知恵を、また貸してほしい」

「また、ですか。いいんでしょうか。一応、刑事さんには事件に対

して守秘義務が」

「いーちゃん！」

がたんと不由径さんが立ち上がる。まさか冬眠から目覚めた熊のようだ。もし、不由径さんが本気になったら、ひよろりとしたうさぎのような叔父では潰されてしまう。私は命を賭けても叔父を守らなくてはいけないという気持ちになるが、何も出来ない。

うさぎが熊の手で揺さぶられるのをただ見ているしかできない。

「俺を見捨てるのか、今までやってきたくせに。それも、菓子までもってきたんだぞ。いますぐ吐け。返せ、俺のシュークリーム」

そんな、無茶な。

「あ、あわわ。ふーちゃん、落ち着いて。誰もしいとは、うん。しいとはいってない」

「よし」

くまが、ようやく落ち着いた。

解放された叔父は、ほっとため息。

「陽和子ちゃん、ごめん。事務所をしめて、くれる？」

「はい」

私、いそいそとドアを閉めにいく。本日は営業終了しましたの札を出して、しっかりとドアに鍵をかける。とはいえ、まあお客様なんてほとんどこないんだけど、気持ちとしてはね。

「で、今回の事件は、なにが困っているの？」

叔父が優しく不由径さんに声をかけた。

不由径さんが名刑事の理由。それは、その、実は叔父が知恵を貸しているところが大きい。何度か困り果てて不由径さんが愚痴みたに零した事件のことに、叔父がアドバイスをして解決したということがあり、不由径さんは叔父を頼るようになった。事件解決のお礼として御菓子をいただけるという。

叔父としては御菓子をいただいて、不由径さんの役に立てる。なによりも悲しい人を一人でもいなくなることが嬉しいという。元々、この儲かることのない探偵事務所は、叔父のお父さんのものなんだ

けども、親子二代そろって「悲しい人が少しでも減ればいい」という気持ちから経営しているのだ。だから売り上げとかあんまり考えていない。それで自分たちが生活苦しいと意味がないでしょうといいたいが、実際に口をすっぱくしていうのだが、その損な性分はかわらない。

「お前らも知っているとと思うが、双子のだ」

「あれ、不由径さんが担当なんですか」

私は思わず身を乗り出して尋ねていた。テレビで放送されていることが、まさか現実で、このように見聞きできるとは。ラッキーなどとつい不謹慎に考えてしまう。

「一応、殺人だからな」

不由径さんがため息をつきながら付け加える。

「それもな、参ってるんだ」

「なにに」

「死んだやつがわからない」

それは、またすごい台詞だ。

「つまりは今、見つかったている胴体は双子のうちどちらかだと」

「ああ。首も、一応は見つかったんだ」

「ばらばら死体だったのか」

「そういうこと」

ひえ。

気持ち悪い。

思わず想像して眼を背けてしまった。女の子には刺激が強いというものだ。そういうのは。

「ただ見つかった部屋が問題だ」

「と、いうと？」

「窓、しまってたんだよ。鍵もしまってた……胴体が見つかった部屋は。首が見つかった部屋は、そこからかなり離れていて、さらに言うともたしても」

「密室！」

思わず勢い込んで、私は後ろから声をあげる。

不由径さんが頷く。

「そういうことだ。陽和子ちゃん、声が楽しそうだな」

「え、あ、つい」

楽しんではいけないのはわかってるし、これが大変不謹慎であることも理解しているのだが、思わず声に滲んでしまう。

いかん、いかん、現実に人が死んでるのに。

「あ、けど、指紋とかでは」

「部屋のドアなんかは全部ふき取られてる。その上、その死体の指紋と一致」

「双子の指紋は、確か、おなじだったよね？　確か一卵双生児の場合は」

意知朗さんが言うのに不由径さんが大きく頷く。

「そうだ。双子の指紋はおなじなんだよ」

「つまりは、どっちが死んだのかまるでわからないってことだ」

意知朗さんの言葉に不由径さんがごくごく頷く。

「あのー、私、気になるんですが」

「ん？」

後ろからの私の発言に不由径さんが顔を向けてくる。

「双子の仲はどうなんですか？　悪いとか、ないんですか？　悪ければ、とりあえず、殺したのは、そっちだってことになりませんか？」

結構乱暴なことを言っているのは自分でもわかっているが、言ってみる。

「それらは、俺たちも思うよ。だがな……調査すると、この双子、身分違いのドラマある境遇らしいが、仲はかなりいいらしい。むしろ、この双子の義理の母親、本妻はその双子の仲の良さを妬む位だそうだ」

「ねたむ？」

「この義理てか、育ての母親はな、双子でも自分の育てているほうを溺愛してるんだ。それで双子なのに、もう一人のシンデレラボー

イのほうは嫌ってる」

同じ双子なのに。

けれども、確かに自分が育てた子供ならばまだ愛情はあっても、同じ見た目でも違う子だったら、どうだろう。混乱はするだろうし、愛情というものを抱けというほうが、無茶かもしれない。なんだかんだといっても、愛人の子だし、そういう深い恨みもあるのだろう。「けど、そのシンデレラボーイのほうは、その本妻さんに好かれようと、けっこう健気に努力していたっていうし、本妻さんに育てられた子供のほうも、相当二人が仲良くなるように心を砕いていたらしい」

「つまりは、その本妻さんが片方のことを毛嫌いしていたということか」

「そういうこと」

「じゃあ、双子が双子で殺しあうってことはないってことですか」
思わず尋ねる。

この場合、多額の財産を狙った双子の………というと、あんまりにも非現実すぎるだろうか。またはテレビドラマの見すぎ？

けれども、私の考えを不由径さんは笑ったりはしなかった。むしろ、すごく神妙な面持ちで頷いてくれた。

「そう、たぶん、ない、と思う。だが、金が絡むと人は変わるからな」

「ねえ、ふーちゃん」

意知朗さんが首を傾げる。

「密室はいいけども、どういう部屋なのか、いまいちわからないけども。写真とか、ある？」

不由径さんが身を乗り出す。

なんか内緒話をするときみたいな感じに。私も思わず身を乗り出す。意知朗さんも。三人で額をくっつけあう。

「もちろん」

そうついて懐から出された写真は数枚。

フローリングの床には赤い血痕。机があつて、椅子もあるという普通の部屋だ。

その数枚に、血のついているものがあつた。窓の傍だ。それも暗い。窓に何か看板が置かれているらしい。窓の写真を見ると、その窓の鍵は上から下に占めるかんぬきになっているらしい。それがしつかりと閉められている。

部屋が品よくあるせいか、むちゃくちゃ雰囲気がある。

「家は馬鹿みたいにでかくて、四階建てなんだ。いろいろと増築していった結果らしい。だが、住んでる奴が家族三人に手伝いが一人に犬だけだつていうんだから世の中、間違つてるよなあ」

「少ないですねー」

思わず私、声を出して聞いてしまう。

「ああ、なんでもそういう方針なんだと、犬なんてでっかい黒い、えーと」

「ラブラドル？」

私が言うのと不由径さんが頷く。

「そうそう、人懐っこいのが首輪だけされて、庭の中動きたい放題でさ、それがすげーやんちゃで、気がつくとも鑑識の持ってきたカメラとかどこぞに隠して見つからないの」

まったく、困ったもんだと不由径さんは言いながら肩をすくめた。

「そのカメラはまだ見つからないしなあ」

「ねえふーちゃん」

意知朗さんが声をかけると頭をかいていた不由径さんが真剣な眼になる。何か事件の解決のヒントを得られると想っているらしい。

「この、窓にある看板は？」

「ああ、これは、なんでも古い作りで風がはいってくるから風除けがほしいとかで双子の兄のほうの手伝いにかかせたらしい。ちよつと大きめの板だったな」

「へえ」

「なんかわかったか」

「うっん。こういう板は、買うの大変だったろうなあて、運ぶのも」
「いや、意外と薄いやつらしいから。ああ、重みもそこまでないらしい。まあ風避けだからな。で、話を戻すぞ。ここは一階の部屋で、元々はここの主人の書斎だったそうだ。胴体が見つかったところだ。ちなみに、死体は、この床のところに転がっていたわけだ。んー、あーとな」

そういつて不由径さんは立ち上がると、突如として壁にへばりついていた。

「こんなかんじだ。こんなので、窓辺のところにころーとな」
たぶん、死体の真似をしているのだろう。

なんか、ヤモリが床にひっついてるようにしかみえないが。

「首はどこで見つかったの？」

「ああ。それはな。こっちの写真な」

二枚目をぺらりとめくる。

ふわふわの絨毯の敷かれた部屋。その黒色に金庫が大きく写されている。私としては、まさか人様の家に、こんな高級そうな金庫があることが物珍しい。

「ここからだ」

「金庫から？」

「そう、馬鹿丁寧にも、しっかりとダイヤルロックした金庫だ」

「その金庫の番号を知っているのは？」

「奥様と息子の片方、育てられたほうだけだ。ちなみにこの金庫は、いつもは土地の権利書とかをいれていて、滅多に開けることはないそうだ」

「あれ、けど、じゃあ、犯人って双子の育てられたほうってことじゃないんですか？」

私、思わず聞き返してしまう。

だって、金庫の番号を知っているのか、その二人だけだとしたら、犯人は自然と特定されてしまったも同然。

けど、そこで不由径さんが首を横に振る。

「けど、ここには、小さなキーがあるだろう」

「あ、うん」

覗きこむと、写真に映し出されている金庫には、ちゃんと鍵がついていた。ダイヤルがついて更にはキーまでついているとは、すごい。

庶民である私は、ついそんな感想を持ってしまう。

「このキーは、弟が持っていたそうだ」

「弟っていうと、双子の？」

「この屋敷の手伝いの人に聞いたから確かだ」

不由径さんが厳つい顔を更に厳つくして大きく頷く。こんな強面で事情聴取したのだろうか。きっと、この顔に迫られたら、なんだってぺらぺらとしやべってしまうだろう。私はその事情聴取を受けたお手伝いさんにいたく同情した。

「家族になるのだからといって信賴の意味をこめて、鍵の管理をしていた兄のほうに渡したのを手伝いが目撃している。それにダイヤルが本当に判らないかという、そうでもないかもしれないんだ」
「どうして」

「この金庫のダイヤルは、双子の誕生日らしい。それを兄が教えなかったという保証はないしな」

でたらしめな数字なら覚えなくてもいいけども、自分の誕生日だったら覚えているだろう。

「だから、どちらかわからないと」

「そういうことだ」

「なんか身体に特徴とかは？ 子供のころ怪我しているとか、ほくろとか」

「まったく、そういうのはないらしい」

それってお手上げですね。

などと軽口に言うことも出来ない。なんといつても、本当にお手上げで参っているのだから。被害者がわからないなんて、すごく困る。これだと、犯人を捜しようがない。けど、逆にいえば被害者が

わかれれば、犯人も自動的にわかるのではないのかと安直に私は考えてしまう。

「いーちゃん、さっきからだんまりだが、なにか気がついたことはないのか？」

不由径さんが声をあげる。

それまで黙っていた意知朗さんは目を三度、ぱくちりとさせる。

「えーと、じゃあ、いつてもいい？」

「いえ。いえ。なんでもいえ。今だったら快くなんでも聞くぞ」

ずいっと不由径さんが身を乗り出していう。本当に溺れる者は藁でも掴むの典型的な図だ。

「紅茶が飲みたいな」

意知朗さんは、どうして、こういう性格なんだろう。

私と不由径さんは、思わずずるりと肩を落としてしまった。そんな私たちを見て意知朗さんは、にこにここと笑う。

「紅茶をもう一杯飲みたいなあ」と

思わず、私と不由径さんががくつと肩を落とす。

なんて平和なお言葉。

それも意知朗さんらしい、間の少し抜けたしゃべり方なため、ますます気が抜けてしまう。

「あー、飲め飲め。好きなだけ飲め」

不由径さんがソファにどっかりと深く腰掛けて言うのに、意知朗さんは、嬉しそうにいそいそとソファから立ち上がって、紅茶をおかわりする。

「いいんですか」

「あいつはああやって脳を活性化してるんだ。たぶん。それに紅茶を飲むと推理が冴えるしな」

確かに。

それは、長年のお付き合いでわかっていることだ。

飲めば飲むほどに推理が冴える。

なんだか、それってどこかの拳法家みたいな台詞だけでも、意知

朗さんの場合は、それが紅茶なのだ。飲めば飲むほどに機嫌よくなつて、しゃべりだす。それも考える力も増すらしい。

この紅茶、本当に大丈夫なのかしら。

それとも、意知朗さんの体は紅茶を特殊に感じてしまうような体質をしているのか。

マイペースにソファに戻ってくると腰掛けて、ゆつたりと紅茶を飲んで、にこにここと笑う意知朗さん。

これが殺人事件を聞いている態度なのか。推理をして、はやく犯人を暴いてほしい。そう思う私としては、ちよつと苛々するが、ここで下手に怒鳴ってはいけないというのは経験上、ちゃんとわかっている。なによりも、これが私の叔父であり、名探偵のスタイルなのだ。ホームズだって阿片しているし、煙草をすばすばやるじゃないか。煙草や阿片なんて体に悪いし、他人にだって迷惑をかける。けど、紅茶を飲むだけならば、他人に迷惑はかけたりしない。

「それでですねえ」

ようやく紅茶を堪能した意知朗さんが口を開いた。

「お話をどうぞ」

まったく、もうっ。

私は、本当にどうしようもなくマイペースな叔父にため息をついた。

「私、その母親っていうの気になります。その弟のことを嫌ってたんですか？」

「ヒステリーだなあ。女のヒステリーほどに始末に負えないものはないというが、あれは、本当に大変だぞ」

私は考えてみる。相手は双子なわけだ。同じ顔で、声で、体格で、その二人を相手に、片方は愛して、片方は毛嫌にする。その考えがいまいち理解できない。

もし自分が母親だったら、そもそも子供を引き取るという地点でいやだと思う。わざわざ子供を引き取って、大切に育てて、けど、その子にもう一人いたらいやがるだなんて。

「なんか、矛盾してませんか？」

「なにがだ」

「その、双子をどうして母親は嫌うんでしょう。片方は愛して、片方はいやだなんて……だって、いつてしまったら、二人とも血は自分と繋がっていないのに」

「そりゃ、そういうものなんだよ」

不由径さんがため息混じりに言う。

「けど、双子ですよ」

「自分が育てたのと、そうではないっていう差が母親の中ではあるんだよ。双子っていつても、だいたい自分が育てた子と、そうでないのはわかるものさ。双子でも、仕草なんかは違うものだし」

意知朗さんが言うのに少し納得。

「それにね、それは、陽和子ちゃんはわからないっていうけど、それは陽和子ちゃんが、その人の立場になれるわけがないんだから、わからないと思うよ。陽和子ちゃんは、その人の気持ちかわかる？」

私は、黙って首を横に振った。

「その女性には、いろいろなことがあったんだと思うよ。ただ、育てた子が可愛いというのあるんじゃないかな。そして、同じ顔、姿をしていても、その子は愛人の子だっていう。だったら、どうしても受け入れられない」

意知朗さんの言葉に、私はなんとなくだが、その母親の気持ちというものがわかった、気がした。たぶん、私では絶対にわからないものもあるのだろう。——ときどき、意知朗さんの言葉はナイフみたいに私を切り裂く。驚くぐらいにざっくりと、確信をついて言葉が出てこなくなる。そうになると、痛いと思う前に驚いて、何も言えずに黙り込むしかなくなる。なんだか自分のいやなところをたたきつけられているような、優しい声で、優しい口調でいわれるから、ますます、そんな気分になる。

私が想像できるのは、一つ。

母親としては、とても葛藤があつたに違いないということ。

その上で子供を引き取って、育てる。

確かに、自分が育てた子かわいい。けれど、愛人が育てた子がひよっこりと現れたら、それこそ、たまったものではないだろう。

可愛さあまって、なんとやらとはよくいうものだ。

きつと母親も辛かったに違いない。

私だったら、こんな状況は耐えられない。

考えれば考えるほどに胸が苦しくなった。

「だから、育てた子供になんとしても財産をやりたいと母親は思うわけだ。自分の育てた子にだけ財産やらなんやらと残したい。けど、同じ顔でも愛人が育てた子にはなにもあげたくない。それも一つの母親の愛情といってもいいかもしれません」

そこで意知朗さんが言葉を切った。

「ふーちゃん、死体が見つかったときの写真を見せてくれる」

「ほら」

差し出されたのを見て意知朗さんは首を横に振る。

「死体の写真はないの」

「一応あるにはあるが」

不由径さんが困った顔をする。それも、そうだろう。うら若き乙女に死体の写真なんて見せてはいけない。こういう些細なデリカシーが叔父には欠如しているのだ。

「気になるんだ。死体のこと」

「なんで、また」

「凶器はどうしたのかって……首が切れていたわけでしょ」

「ああ」

「その凶器は」

「見つかってない」

二人のやりとりに私は手をあげる。

「包丁とか」

「それはない」

不由径さんが即答する。

「だったら、鑑識が絶対にわかるはずだ。陽和子ちゃんはわからないかもしれないが、人の体っていうのは、すごくかたいんだ。それも首は骨の一番かたいのがある。だから、それが斬れるっていうと、包丁とかだと必ず刃こぼれするはずだろうが、それはなかった」

「それに血」

「カーペットについてるが……変か」

「写真で見る限り、はっきりとわからないけども……すごく血が流れているのはわかる」

「なんだか二人の会話は生々しさが増えてきたのに私としては口を噤んでいるしかできない。」

「実は私は血が大の苦手なのだ。自分の血を一滴でも見ると、叫んじゃう。大量の血なんてますますだめ。写真で見るには、まだ耐えられるけども。」

「ねえ、ふーちゃん、それってざつくばらんに言って……何も判ってないってこと」
「うっ」

不由径さんがたじろいだ。

「あーあ、どうして、こう叔父はデリカシーがないのだろうか。ときどき、すごく人の心を考えているんだなって思うと、こうやって人の言っただけでほしくないことを的確に言い当ててしまう。」

「わ、わかってることはあるぞ」

「たとえば？」

「凶器は鋭い刃物だ」

「それくらいわかります」

「きっぱりと、叔父がいう。ああいえばこういう。典型的ないやなタイプだ。」

「お前な、俺に嫌味いうのか。わざわざ菓子を持ってきてやったのに」

「別に嫌味のつもりはないですけども……一つ伺いたいのですが、その母親はどうなんですか。事件のあと、なんていってます？ ど

「ちらが死んだとか」

「母親は息子が死んだと叫んでいるよ。ヒステリックを起していて混乱してるから双子のどちらかなんて判断できないだろう」

「たぶん、その母親は、正直なことをいつてるんですよ」

紅茶を飲もうとした不由径さんの動きが止まる。

「それは、つまりは、双子の兄のほうで死んだってことか」

「ですから、その母親の言葉のままですよ。息子さんが死んでしまわれた。その母親にとっては息子さんが死んでしまった」

「あのなあ、俺が知りたいのは」

「最後まで聞いてください」

意知朗さんが、きつぱりとした口調で言う。

「ただ、これは憶測ですが、頭は弟さん、胴体はお兄さんの……だと思っています。もしかしたら、反対かもしれません」

「待てよ、それって」

「二人とも死んでしまったんです」

「二人、とも？」

私と不由径さんが声をあげる。意知朗さんは紅茶を一口飲んだ。

「つまりはですね、二人とも死んでしまっているわけです。それも、たぶん、その部屋で見つかったほうは、自殺です」

「まてまて。それって、じゃあ、金庫で見つかったのは」

「ですから、それを隠したのが、部屋で死んだほうなんです。つまりは、自殺だけでも、自殺に見えないように……初めに死んだほうの死を隠蔽するための犯行なんです。たぶん、なんらかのことで双子の片方が死んだんです。予想をいえば、たぶん、兄のほう、それを見つけた弟は、なんとしてもそれを隠蔽しなくてはいけなかった。だから、首を金庫に隠し、そのあと自分も自殺したわけです。出来る限り自殺だとわからないように」

「わけがわからん。どうしてそんな」

「母親を守るためでしょうね」

「母親って、あのヒステリーの母親か」

「その母親は双子の弟のほうを殺そうと思ったんじゃないでしょうか。自分の子にすべての財産をあげたいと思うから、けれど、後姿で間違えてしまった。間違えて自分の息子のほうを殺してしまった。それを弟が見つけた。母親が自分の息子を殺した有様を見て弟は驚き、そして、なんとしても母親を守らなくてはいけないと思ったんでしょうね。なんとか兄のふりをして母親を遠ざけると、その死体をどうにか始末しようと考えた。母親に罪が被らず、そして自分の良心の癪癢から彼はこの方法を選んだ」

そこで意知朗さんは紅茶をまた一口啜った。

「まず首を切断は、体と頭があると運ぶのが大変だっていうのと、もしかしたら母親が殺すときに首になにか致命的な殺した証があったのかもしれない。首を絞めたあとがあったとか、それでこの計画を考えたときに思いついたんじゃない。まず兄の首を切断し、頭だけを金庫に仕舞いこみ、その体は隠してしまう。そのあと自分は例の部屋にいくと、自殺する」

「自殺って、どうやって」

「首を隠さなくてはいけない。だから、まず、首を切る方法ですが、引力の法則を使用したのだと思います。一階だから、四階の真上から何かとがったもの、首にまずワイヤーをかける。そのワイヤーの先には、窓の裏手に映っている板につける。板は軽いから氷をつけておく。それを上から落とすんです。方法はとっても簡単ですよ。紐で上から吊るして、ライターや蠟燭で火をつけてじりじりと紐を焼いてしまう。部屋に残るのはどうせ蠟燭だけだから、誰かが怪しむことはないし、そのうちお手伝いさんが片付けてしまう。窓にワイヤーをつけた自分の首を晒して待っていればいい。そうすれば首は切れた死体は部屋の中に残る。その上、その首を切れた衝動で、窓の鍵もしまってしまう。氷は解けて消えてしまうし。ワイヤーも首をきったときに上に飛んで消えてしまう。それも首は犬を飼っているということ、その犬が首を銜えてもっていつてしまう。そういうことも考慮したんじゃないでしょうか。だって、鑑識さんの力

メラを隠すくらいですから」

「待てよ。お前が言っていることが正しいとしても……そんなの、狂ってる」

不由径さんが呟くのに意知朗さんは困ったように笑った。

「この方法が一番いいと弟さんは思ってたんでしょね」

「どうしてだ。犯人を突き出せばいいものを」

「母親を守るには死ぬしかなかった」

「だから、なんで母親を」

「どうして子が出来なかったか。ここは憶測ですが、その母親はプライドの高い人ではないのでしょうか。子供が出来ないというのに周囲からの言葉によりひどいストレスによって精神も大変だったのでしょうね。だから愛人の子でも引き取った。もしかしたら子供が出来ないからわざと外に女を作って生ませたのかもしれない。そんな彼女にとっては子供は何よりも守り、この家を継がせたい存在だった。そこに愛人の、まったく同じ顔の子がきてしまった。それに母親は混乱した。自分の子が一番可愛いという気持ちが強くて、どうしても、なんとかしなくてはいけないという使命というか、強迫観念にかられてしまった。だから、彼女は今、息子は死んだと叫んでいる」

「さて、じゃあ、その死んだやつのお体は」

「家の中に隠してあると思います。犬のことも調べてみれば首が見つかるとは思いません」

不由径さんが立ち上がった。

「いますぐにいつてくる」

そいつってどたとたと出ていくのを私は見送り、意知朗さんを見た。

「悲しいですね」

「そうですね。ねえ陽和子ちゃん」

「はい」

「萌ちゃん、たぶんあると思いますよ」

一瞬、私は何を言われたのかわからなかった。だが、それがあの女の子の人形であることを思い出した。

「あると、思いますか？」

「たぶん、あの子は一人っ子なんじゃないのかな。お菓子を出したとき、なんの遠慮もなく真っ先に食べていったのは、誰かに奪われることもないし、甘やかされた傾向があると思うんだ。そんな甘やかしている娘の大切な人形を捨てたりはしないと思うんだ」

「じゃあ、どこに？　なんで親はいわないんですか？」

「たぶん、あの子が最近は何物も大切にしないっていう罰も込められているんじゃないかな。あと人形は水につけると髪の毛の色がわかるんだよね？　あの子が探しているとき髪の毛をぬらして髪の毛を変えているのかもしれない。その状態で棚なんかの上に置いてしまえば、小さな子は自分よりも下は探すけども、上はまず見ない。そう、人形はずっと上にあるけども、見つからない理由」

「いつ、それ気がつきました？」

「話していてかな。親の躰もあるんなら、明日まで待ったほうがいいと思うんだ。うん。電話をして、あの子がここにきたことをご両親に話しておこうと思うんだ。そろそろ罰も解いてもいい頃だと思うから」

「それがいいですね」

私は本気でそう思った。

不意に意知朗さんがちょっと困ったように笑いながらカップを差し出してきた。

「よかったら、紅茶をもう一杯おかわりしたいな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3727p/>

紅茶をもう一杯と探偵は口にする

2010年12月8日01時10分発行